アール・ブリュット ゼン&ナウ Vol.2 Echo こだま返る風景

Art Brut Then & Now Vol.2 Echoing Cityscapes

会期：2023年1月21日(土) – 4月9日(日)
会場：東京都渋谷公園通りギャラリー　展示室1、2
主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館　東京都渋谷公園通りギャラリー

Exhibition Period: Saturday, 21 January – Sunday, 9 April 2023
Venue: Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Galleries 1 and 2
Organizer: Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Museum of Contemporary Art Tokyo,
Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

ごあいさつ

東京都渋谷公園通りギャラリーは、このたび、「アール・ブリュット ゼン＆ナウ Vol.2　Echo こだま返る風景」を開催いたします。
「アール・ブリュット ゼン＆ナウ」は、国内外のアール・ブリュットの動向において、長く活躍を続ける作家と、近年発表の場を広げつつある作家を、さまざまな角度から紹介する展覧会シリーズです。
2回目にあたる「Echo こだま返る風景」では、建物や家が立ちならぶ街の風景を、独自の眼差しで再構築する作家たちを紹介します。それらの風景は、上空から俯瞰するような構図や天地のない描き方、奇抜な色彩の建物群など、それぞれにユニークな表象が見られます。それらはどれも幻想的な世界観をあわせもち、ここではないどこかを思い描く作者の視線をたどることができます。また、広大に延びていく遠景と身近にある近景が交錯し、どこまでも続いていきそうなエネルギーが感じられるでしょう。
作家それぞれが眼差してきた風景は、現実と想像の、近景と遠景の、自己と他者の、こちらとあちらとのあいだを反響しあうこだまのように、人知れず広がりつづけています。本展が、鑑賞者それぞれとこだまし、ときにざわめき、ときに静かに共鳴する特別な風景との出会いとなれば幸いです。
最後になりましたが、貴重な作品をご出品くださいました出品作家の皆様、本展の実現のために貴重なご助言とご協力を賜りましたすべての皆様に、心からお礼申し上げます。

2023年1月
(公財) 東京都歴史文化財団 東京都現代美術館
東京都渋谷公園通りギャラリー

凡例

- 本書は、東京都渋谷公園通りギャラリー 展覧会「アール・ブリュット ゼン＆ナウ Vol.2　Echo こだま返る風景」の出品作品を掲載している。
- 編集にあたり、各作家ページに図版を掲載し、図版キャプションは各所蔵機関より提供いただいたデータを参照し、「図版番号」「作品名」「制作年」「所蔵先」の順に和英で記載した。
- 作家解説は河原功也（東京都渋谷公園通りギャラリー）が執筆した。
- 作品リスト（pp. 51-54）では、「作家名」「図版番号」「作品名」「制作年」「技法・材質」「サイズ（cm）」「所蔵先」の順に和英で記載した。サイズは縦×横×奥行の順に記した。
- コピーライト／写真クレジットは、巻末にまとめて掲載し、項目ごとに主にページ順に記した。

Explanatory Notes:

- This catalogue contains artworks displayed in Art Brut Then & Now Vol.2 Echoing Cityscapes at the Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery.
- Plates are printed on each artist's page with captions that reference data provided by the collector. Captions are given in Japanese and English in order of Catalogue Number, Title, Date, and Collection.
- The artist commentary was written by KAWAHARA Koya (Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery)
- List of works data (pp. 51-54) is given in order of Artist Name, Catalogue Number, Title, Date, Media, Size (cm), and Collection. Size is indicated by height x width x depth.
- Copyrights and photo credits appear at the back of the catalogue, where they are listed for each item principally in page order.

謝辞

本展覧会の開催にあたり、ご協力を賜りましたすべての関係者の皆様に、心よりお礼申し上げます。
（順不同／敬称略）

磯野貴之
古久保憲満
後藤拓也
佐藤慶吾
辻勇二
横溝さやか

北澤桃子
古久保満
諏訪冬樹
辻ヨシ子
中尾大良
三宅昌子
毛利大介
安田葉子
横井悠
米田昌功

NPO法人グループ彩　生活工房
嬉々!!CREATIVE
社会福祉法人　風舎とみたか
障害福祉サービス事業所 明日香
特定非営利活動法人障害者アート支援工房COCOPELLI
ボーダレス・アートミュージアムNO-MA

「眺め刻まれる風景――こだまする記憶と残響――」

河原功也（東京都渋谷公園通りギャラリー）

風景と聞いたとき、あなたはなにを思い浮かべるだろうか。壮大な山の連なりやどこまでも延びる水平線、高層ビルの立ち並ぶ摩天楼。家の窓から見える路地や塀の上で昼寝する猫たち、通学・通勤電車からのいつもの眺め・・・。思い浮かぶ風景は人それぞれに、一定の距離感を伴い、いくつも存在するだろう。それらは非日常から日常まで、それぞれのフレームによって切りとられ、空間や時間、心の状態など、切りとる主体の映し鏡のように、残像として定位し続ける。そうであるならば､風景を切りとる主体と実在する場や状況との交差点に、記憶として、あるいは残響として、風景はあるともいえる。

本展は、アール・ブリュットと呼ばれる作品群の特徴の一つといえる、「くり返し」の表現から出発し、当ギャラリーの位置する土地との親和性のあるモチーフとしての「街並み」、さらに、各作家と各作品の成り立ちとの関係性から、「Echo こだま返る風景」と題した。類まれな集中力と執着によって表現された作品の数々は、くり返される表現行為の密度と堆積の比重によって、作品としての強度を高める。一方で、作品が成り立つその過程において、それらが作家の衝動からだけで形成されるものではないことも見えてくる。これらの点について、展覧会の会場を――これも一つの風景として捉え――振り返りながら考えてみたいと思う。

展示室1の中央の展示台には**後藤拓也**による家を模したカラフルな立体作品が鎮座している。それは小さな集落のジオラマを想起させ、歩み寄るにつれ、屋根付近がキラキラと輝いているのに気が付くかもしれない。それは無数のホッチキスの芯によって、素材同士が固定されているためである。その手法は後藤独自のものだ。この作品が作られたきっかけは、後藤が兄の家の改築現場を間近で目撃したことであったという。ホッチキスを使用する手法からは、工事現場などで多用されるビス打ち機の部材に食い込むような音――バスッバスッ――が連想され、家が生み出される臨場感が感じられる。比較的初期の作品は、ブリコラージュと呼ばれる手法のように、画用紙の他にその場にあったありあわせの材料が使われていた。後藤はその後、材料の改良を行いながら、100円ショップや文房具店などでトタン板のような波打つタイプの紙を新たに発見し、それを壁面や屋根に使用しはじめることとなった。後藤は独自の手法と素材選びを発展させ、今もゆっくりとだが着実に、新たな理想の家を建設している。

会場入って左側には、都市の喧騒を感じさせる**古久保憲満**の作品が広がる。初期のお絵かき帳のドローイング作品も含め、古久保の絵画は見るのに時間がかかる。その理由は、描かれるモチーフが隙間なく群を成すことに加え、無数の視点の移動を伴うからだ。画面全体は地図のような、上空からの眺めに見える。しかし、細部の描写を見ていくうちに、正面から見た建物や横から見た車など、見下ろすような視点だけでなく、その世界に立っているかのような視点が混在していることに気がつく。上空から見下ろす景色の抽象性と、地上から水平に眺める景色の具象性。この二つをあわせもつ古久保の都市風景は、スクラップ＆ビルドをくり返す現代の都市部の混沌とした状況を物語るようだ。しかし､ここまで述べておきながら、古久保の絵画には、人を寄せ付けない圧迫感はなく、見る者をその世界に没入させる吸引力がある。それは、古久保が描くフリーハンドの線のもつ手触りや色の塗り方、とくにその光の表現に惹かれるからではないだろうか。丁寧に引かれた輪郭線から柔らかくはみ出た、電灯や電球からほのかに放たれる光のもやが、その世界における生活感をこちらに漂わせている。これらの作品群は自宅で描かれ保管されており、いまなお描かれた世界のように増殖が止まることはない。

向かい側には、描く土地の特徴やランドマークを強調してコラージュした風景を描く、**横溝さやか**の絵画作品および紙芝居のための装置と、横溝が実際に行った紙芝居の映像が展開している。展示されている《SHIBUYA2020》と《大阪天国》は、それぞれ作品名にある都市の風景を描いた、大きな平面作品だ。その大画面のなかには小さな物語があふれている。それは神話のような壮大な物語というよりも、だれもが体験したことのありそうな身近な人々のやり取り、街中でのハプニングである。街中に描かれている建物や人々を見ると、影がなく、さらに言えば画面手前と奥で大きさにあまり差がない。絵画的な遠近法による空間把握を意図しておらず、むしろ、絵本に見られるような1ページ毎に物語の場面を的確にわかりやすく展開する手法を思わせる。登場人物に大きさの違いがあまりないところには、それぞれに起こる出来事を等しく扱っているかのような優しさと温かさが感じられる。制作の背景には、横溝とアトリエスタッフのあるやり取りがあったそうだ。ある日、横溝はアトリエ内でぶつぶつと独り言をつぶやいていた。その様子に気が付いたスタッフが耳を傾けると、何かのキャラクター

に扮した横溝が即興的な物語を演じていたという。そこでスタッフは、横溝の魅力が発揮されるように絵本を描くことを提案した。こういった日常の気づきから発展し、紙芝居公演から絵画制作までを幅広く手掛けるようになっていった。

振り返ると、**佐藤慶吾**の色彩豊かな作品群が待ち構えている。佐藤はある時期、カレンダーの裏紙に同じモチーフを描き続けていた。それは、家族との楽しい時間を過ごした思い出の場所から見えるホテルであった。記憶を頼りに描かれるホテルは、4棟から8棟ほどの建物群として画面いっぱいに構成されている。その建物は屋根に三角形の構造物が描かれており、その下に四角形が連なるようにして建物を成している。地面が描かれず、建物の中腹から天辺までが描かれているため、佐藤の視点は地上よりも空に近いことがわかる。さらに見ていくと、画面の前景にはホテルがあり、後景には格子状の線が描かれている。佐藤によると、この格子状の線は室内側にある窓を描いているそうだ。つまり、本来ならば手前にあるはずの窓が後景に追いやられている。そう考えると、実際にその窓から見えた景色には他にも建物があっただろうし、空には雲や鳥、太陽や月が見えていたかもしれない。けれど、佐藤はホテルのみを力強く描いた。正面性の強い構図とはっきりと大きく描かれたフォルムからは、古代エジプトの絵画に描かれる王の図像を思わせる迫力がある。王はその当時の人々の心の中では実際よりもはるかに大きく見えていたという。ホテルは佐藤にとってはどのように映っていたのだろうか。

展示室2へ進むと、**磯野貴之**の作品が中央に設置されている。磯野の作品《でんちゅうでんせん》は、無地のらくがき帳に電柱と電線がくり返し描かれている。36冊分の制作には約3ヶ月の月日が費やされた。36冊が1冊にまとめられたことにより、結果として、分厚い百科事典のような重量の作品が完成した。スピード感とリズムのある線の運びを見ていると、軽やかかつ速やかに次々と描いていったことがうかがえる。この走り書きのような描写方法は、イメージを一気に噴出させる集中力とエネルギーの賜物である。しかしあふれ出たイメージは、勢いだけで描き出したのではなく、ひとつなぎの映像のようにまとめられている点で、編集された風景のようである。車窓に映り流れゆく電柱と電線の光景は、磯野の通学の行き来に見える日常風景であった。展示室には作品に並置するように、36冊分のほぼ全ページが記録された映像も投影されている。コマ送りされる映像は、まるで磯野の見たイメージを追体験するかのようだ。どこまでも続いていく電柱と電線。日本の混沌とした風景を象徴するかのような電柱と電線は、日本人の原風景のようでもあり、街中を歩くとどこであっても目にすることができるものだ。磯野が描き出した街の余白にのびる五線譜から、潜在化する街の音風景が聞こえてくるかもしれない。

同じ空間には、磯野とは対照的に、細かく描き込まれた街並みをあらわす**辻勇二**の作品が並ぶ。辻の描く風景は、鳥瞰図法といわれる遠近法の一種を想起させる。文字通り、上空を飛ぶ鳥の目から見た地上を描く技法として、多くは観光地・山登りといったレジャーで賑わう土地の地図などに用いられている。辻は家族と行った旅行先の街並みやその道中に眺めた海や川、橋や木々を記憶した。または、高いところから見渡した遠景のなかに見えた、小さな家々、横断歩道橋、車両の数々を同じように記憶していた。いろいろな場所で体験した風景との出会いを起点に、記憶と想像を細かく織り交ぜて描いている。行き交う人々の話し声や通りすぎる車のエンジン音、橋脚にあたる水音、ビルの間を抜ける風の音。黒いペンのみで描かれたモノクロームの風景には、辻が実際に見聞きした世界の諸相が組み込まれている。また、長らく横1枚で描かれていた作品群も、母の一言によって近年では、同じ紙を2枚つなげて縦向きの構図へと拡張した。それは、辻の描く世界が画面の縁の外を出てもずっと広がっているのではという、見る側の想像を現実のものへと変えた。広がり続ける風景の先を行く辻の姿が目に浮かぶ。

会場をぐるりと巡れば、作者それぞれの、見たこともない風景の表現に出会う。それはいわゆる写実的に描かれ遠近感の整った風景画とは異質なものである。ここで見られる風景は、目や手で描かれたというより、かれらの心で眼差され、くり返し描かれてきた風景であるといえるかもしれない。描かれるモチーフや手技の「くり返し」の表現には、作者の思い入れやこだわり、かれらの内側でこだまし続けている残響が強くあらわされている。それらは作者の内側に人知れず蓄積されてきたものだ。そして、身近な存在——家族、施設のスタッフをはじめとした——との日々のやり取り、生活のなかでくり返される営み、顕在化されにくいコミュニケーションの結晶が、かれらの作品には内在している。あなたが眺め、心に刻まれた風景も——記憶として、あるいは残響として——かれらの作品と共鳴し、確かにこだましていることだろう。

主催：（公財）東京都歴史文化財団 東京都現代美術館 東京都渋谷公園通りギャラリー
Organizer: Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Museum of Contemporary Art Tokyo, Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

東京都渋谷公園通りギャラリー
Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery

Then & Now Vol.2
Then & Now Vol.3
Then & Now Vol.4
Then & Now Vol.5

Echoing Cityscapes
Echoing Cityscapes
Echoing Cityscapes
Echoing Cityscapes
Echoing Cityscapes
Echoing Cityscapes
Echoing Cityscapes

Then & Now Vol.2
Then & Now Vol.3
Then & Now Vol.4
Then & Now Vol.5

Echoing Cityscapes
Echoing Cityscapes
Echoing Cityscapes
Echoing Cityscapes
Echoing Cityscapes
Echoing Cityscapes
Echoing Cityscapes

会期：
2023年1月21日(土)—4月9日(日)
2023年1月21日(土)—4月9日(日)
2023年1月21日(土)—4月9日(日)
2023年1月21日(土)—4月9日(日)
2023年1月21日(土)—4月9日(日)
11:00–19:00

作家：
磯野貴之
古久保憲満
後藤拓也
小藤豊吾
佐藤勇一
辻裕司
横関さやか
入場無料

Date:
Saturday, 21 January–
Saturday, 21 January–
Saturday, 21 January–
Sunday, 9 April 2023
Sunday, 9 April 2023
Sunday, 9 April 2023
11:00–19:00

Artist:
ISONO Takayuki
KOKUBO Norimitsu
GOTO Takuya
SATO Keigo
TSUJI Yuji
YOKOMIZO Sayaka

Free admission

Echoing Cityscapes Vol.1
ぜんぜんぜんぜん
ぜんぜんぜんぜん
ぜんぜんぜんぜん

Echoing Cityscapes Vol.2
ぜんぜんぜんぜん
ぜんぜんぜんぜん
ぜんぜんぜんぜん

Echoing Cityscapes Vol.3
ぜんぜんぜんぜん
ぜんぜんぜんぜん
ぜんぜんぜんぜん

Echoing Cityscapes Vol.4
ぜんぜんぜんぜん
ぜんぜんぜんぜん
ぜんぜんぜんぜん

Echoing Cityscapes Vol.5
ぜんぜんぜんぜん
ぜんぜんぜんぜん
ぜんぜんぜんぜん

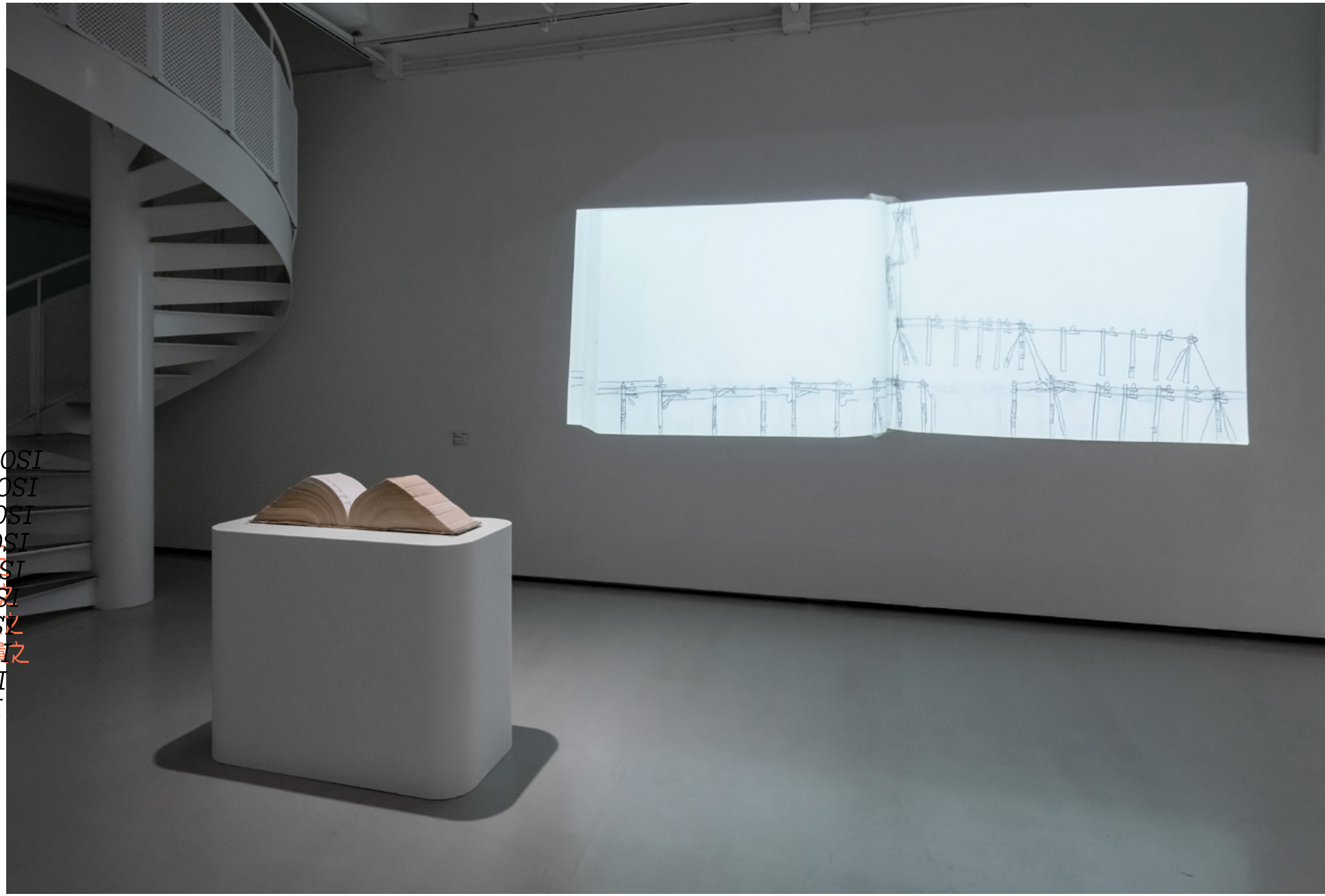
ゼン&ナカ Vol.2
ぜんぜんぜんぜん
ぜんぜんぜんぜん
ぜんぜんぜんぜん

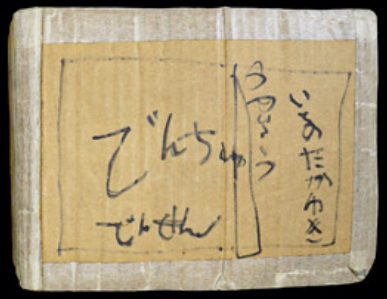
ぜんぜんぜんぜん
ぜんぜんぜんぜん
ぜんぜんぜんぜん

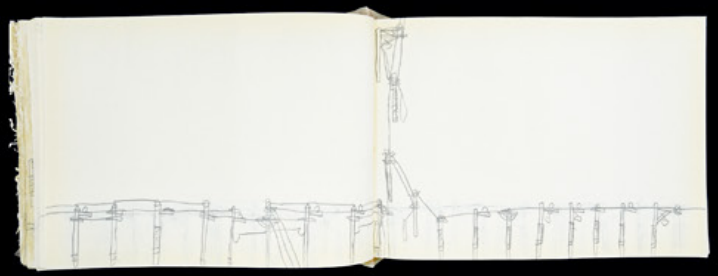
アール・ブリュット・ルーム
アール・ブリュット・ルーム
アール・ブリュット・ルーム
アール・ブリュット・ルーム
アール・ブリュット・ルーム
アール・ブリュット・ルーム
アール・ブリュット・ルーム

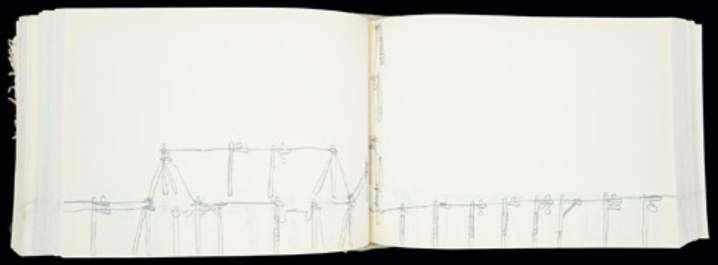
磯野貴之

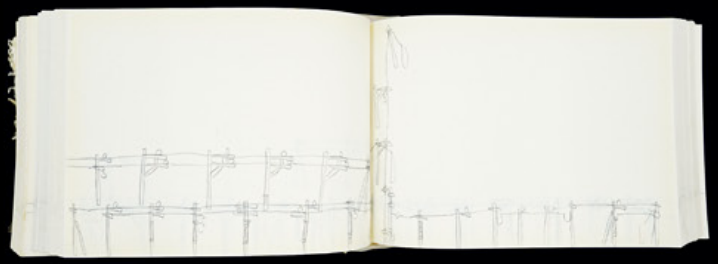
ISONO Takayuki

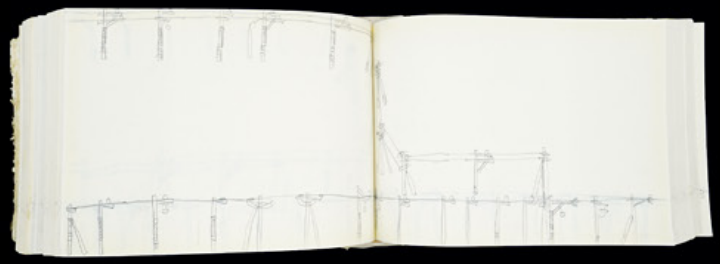


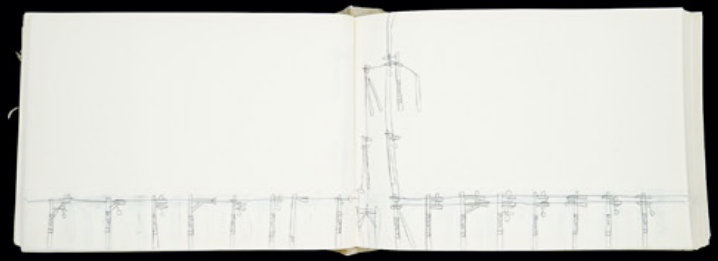

でんちゅう
でんせん

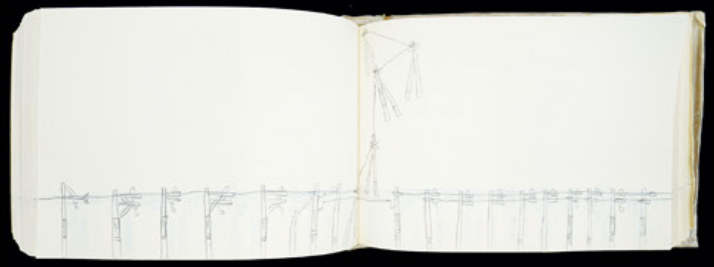








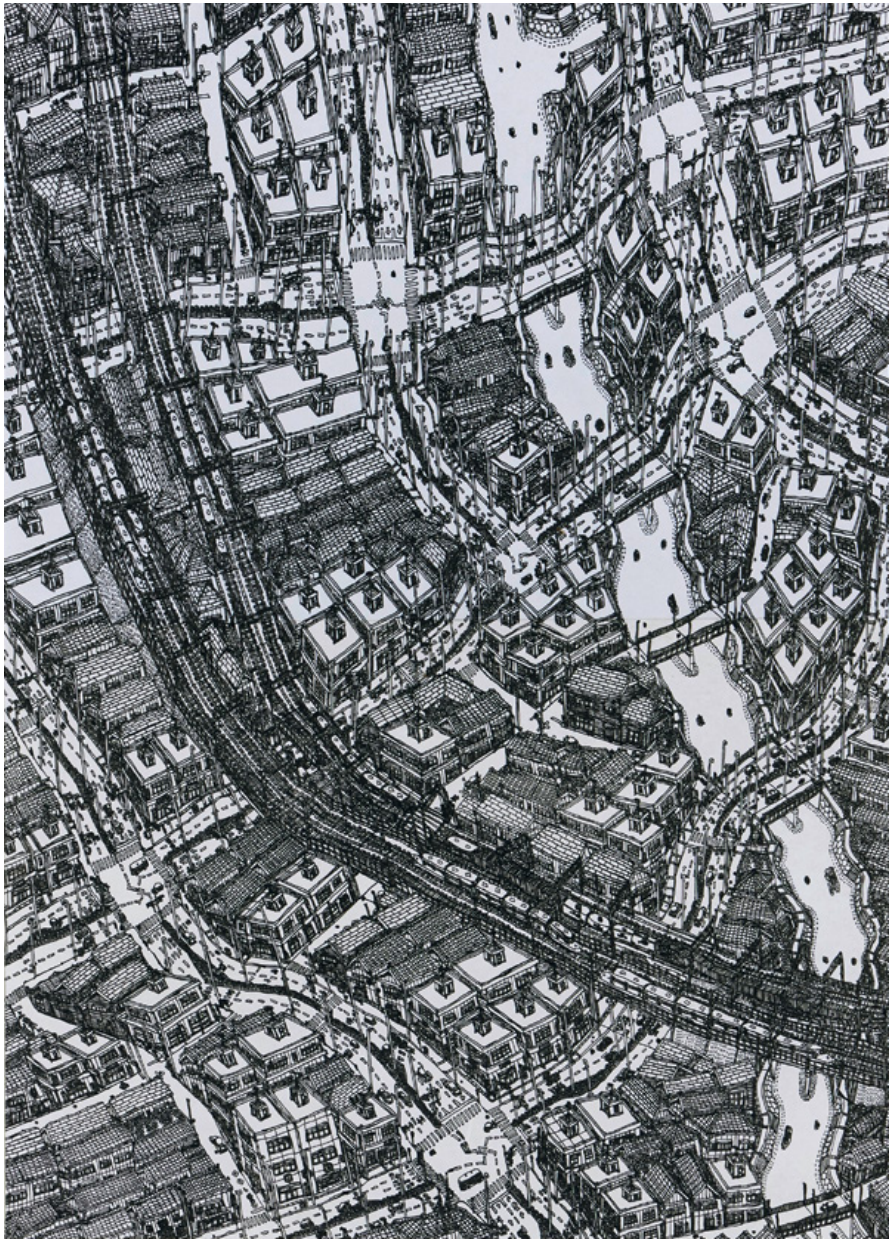




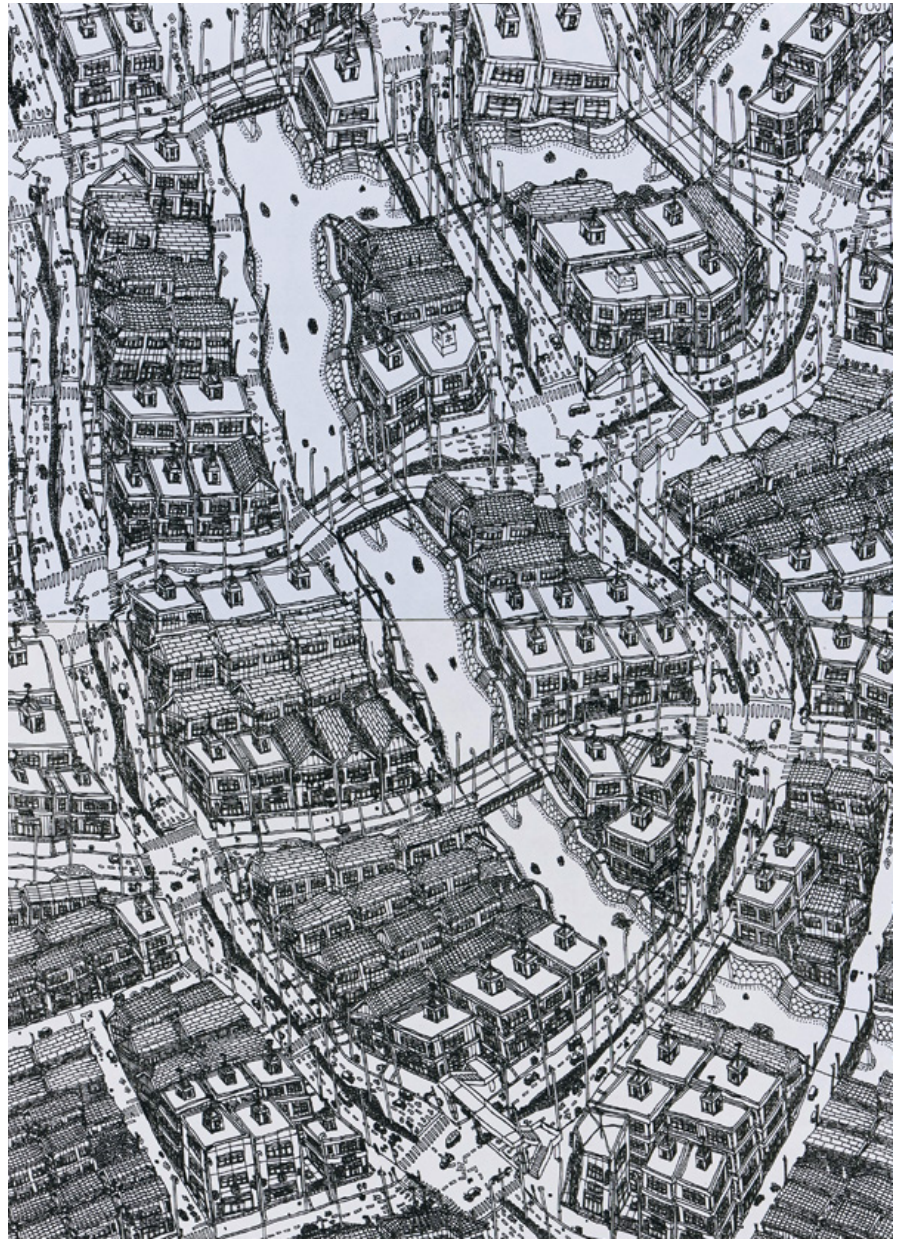
磯野貴之　ISONO Takayuki

1997年、富山県生まれ。特別支援学校に在学中、創作をはじめる。学校の壁や床の隅、ロッカーの裏側など、見つかりにくい場所に落書きをしては、それらを見つけてもらうのを楽しんで過ごしていた。2012年、自宅にあったらくがき帳に、電柱と電線を突然描きはじめる。それは磯野が車での移動中に、後部座席に寝そべり、眺めていた車窓の景色であるという。《でんちゅうでんせん》は昼夜問わず、3ヶ月程かけて描かれ、らくがき帳計36冊分にもなった。そこには延べ、4万2千本の電柱、それらを一つにつなぐ無数の電線が描かれている。全体のページに電線がつながるように描かれており、連続して見ることで、刹那的に流れていく車窓の風景を追体験することができる。単純かつ軽やかな黒い描線が、白いページにどこまでも続くように勢いよく流れ、静謐な世界が広がっている。主な展示に、「日本のアール・ブリュットKOMOREBI展」（フランス国立現代芸術センター リュー・ユニック［フランス、ナント］、2017年）などがある。

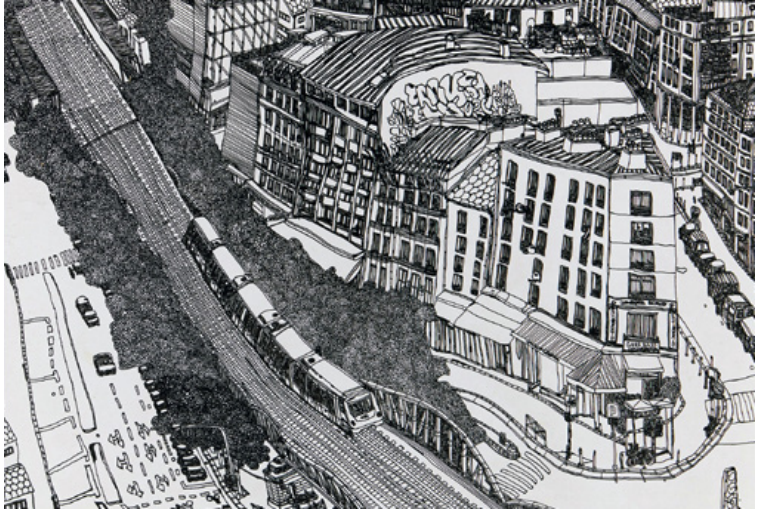
01　でんちゅうでんせん　2012-2013　作家蔵
Telegraph Poles and Electrical Cables　2012-2013　Collection of the artist

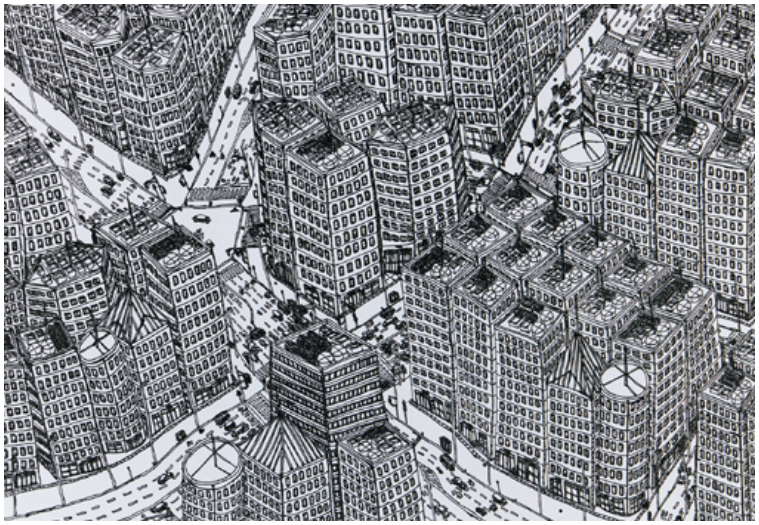


04　心でのぞいた僕の街（令和三年九月十二日）2021　作家蔵
My Town Peeped with My Imagination 2021 Collection of the artist



05　心でのぞいた僕の街（令和四年十月九日）2022　作家蔵
My Town Peeped with My Imagination 2022 Collection of the artist





辻勇二　TSUJI Yuji

1977年、愛知県生まれ。どこか既視感のある架空の街なみを黒い水性ペンのみで緻密に描く。描かれるのは、瓦屋根の家やビル、道路に線路、橋、トンネル、それらの上を走る車両。または川や海、水面を進む船、うっそうと茂る木々など、街を構成するいくつものモチーフである。画面は上空から俯瞰する構図をとり、辻の迷いのない筆跡を見ることができる。その景色は立体的に浮き立つような揺らぎと躍動感に満ちている。一方、人間がほとんど描かれないのも特徴である。しかし画面に潜在する人の気配のようなものが、目には見えないざわめきや囁きを喚起させ、見るものを引きつける。絵画制作は、小学生の頃から続けていた絵日記が土台にあるという。絵日記には日常の記録のほか、旅行中に印象に残った景色なども綴られた。それらの思い出の断片が含まれた辻の描く街なみは、記憶と空想が絡みあいながらモノクロームの世界になって拡張を続けている。出展歴は、「アール・ブリュット ジャポネ展」(アル・サン・ピエール[フランス、パリ]、2010-11年)など国内外で多数ある。

06　心でのぞいた僕の街（平成二十二年九月十九日）2010 作家蔵
My Town Peeped with My Imagination 2010 Collection of the artist

10　心でのぞいた僕の街（平成二十七年二月八日）2015 作家蔵
My Town Peeped with My Imagination 2015 Collection of the artist

09　心でのぞいた僕の街（平成二十五年三月四日）2013 作家蔵
My Town Peeped with My Imagination 2013 Collection of the artist

後藤拓也
後藤拓也
後藤拓也
後藤拓也
後藤拓也
後藤拓也
後藤拓也
後藤拓也
後藤拓也
後藤拓也
後藤拓也
後藤拓也
後藤拓也
後藤拓也
後藤拓也
後藤拓也
後藤拓也
後藤拓也
後藤拓也
後藤拓也
後藤拓也
後藤拓也
後藤拓也
後藤拓也

GOTO Takuya
GOTO Takuya
GOTO Takuya
GOTO Takuya
GOTO Takuya
GOTO Takuya
GOTO Takuya
GOTO Takuya
GOTO Takuya
GOTO Takuya
GOTO Takuya
GOTO Takuya
GOTO Takuya
GOTO Takuya
GOTO Takuya
GOTO Takuya
GOTO Takuya
GOTO Takuya
GOTO Takuya

24

21

26

19

25

15

16

18

いえ 2013-2021 風舎とみたか蔵
House 2013-2021 Fusha Tomitaka

後藤拓也　GOTO Takuya

1987年、宮崎県生まれ。宮崎県日向市にある「風舎とみたか」にて制作を行う。2013年頃から、家を模したカラフルな立体作品を制作しはじめる。主な素材である画用紙は、ホッチキスで固定されている。芝生や砂利、タイルを模した素材を100円ショップで仕入れ、それらを組み合わせながら、さまざまなタイプの住居を制作している。制作工程は、まず台座となっている段ボールに図面を引き、その設計図にそって土台を組む。それからその土台を起点に柱を建て、その柱に壁面を貼っていくという流れである。一つずつの工程を進めながら、形を考え、ふさわしい素材を購入するため、上に行くほどボリュームが増えている。そり立つ壁や膨らんだ屋根は、有機的な勢いと重力に逆らう力強さを感じさせる。見た目のポップさに反して、紙製の骨組みには家全体を支える強固な安定感がある。一日の制作時間はお昼休憩後のおよそ10分程度で、日々、食堂でコツコツと制作に励んでいる。主な展示に、「宮崎アーティストファイル『ギフト展』」（高鍋町美術館［宮崎］、2021年）などがある。

古久保憲満

KOKUBO Norimitsu

29　大都会とつながる町　2013　作家蔵
Towns Connected to the Big City　2013　Collection of the artist

27　無題　2001-2007頃　作家蔵
No Title　circa 2001-2007　Collection of the artist

28　未来の上海ディズニーランド　2010　作家蔵
Shanghai Disneyland of the Future　2010　Collection of the artist

27　無題　2001-2007頃　作家蔵
No Title　circa 2001-2007　Collection of the artist

古久保憲満　KOKUBO Norimitsu

1995年、滋賀県生まれ。小学生の頃より、近未来を思わせる都市風景を描き続けている。はじめは学校に持参したおえかき帳に黙々と描いていたが、次第に大きな紙に描くようになった。きっかけは学校の先生からの勧めだったというが、紙を貼り足し、どうにか大きく描こうとした痕跡が初期の作品群からもうかがえる。記憶やインターネット上に氾濫するイメージを再編成し、細長い高層ビル群や商業施設、乗り物が行き交う様子を緻密に描いている。時計台や教会、寺社仏閣を思わせる建築物、軍事施設や大きな彫像が混在する様は、古今東西の文化が融合した架空の大都市を思わせる。その画面は上からのぞき込むかのような広域の構図だが、モチーフ群は水平方向からの視点をもち、かつ、天地左右を無視して全方位から自由に描かれている。そのためか、独自の規則によって増殖する細胞のように、景色そのものが生きてうごめくようなエネルギーに満ちている。「人間の才能 生みだすことと生きること」（滋賀県立美術館［滋賀］、2022年）のほか、国内外の美術館での展示歴と収蔵作品がある。

30　ネオンオンラインシティ　2014　作家蔵
Neon Online City　2014　Collection of the artist

横溝さやか
横溝さやか
横溝さやか
横溝さやか
横溝さやか
横溝さやか
横溝さやか
横溝さやか
横溝さやか
横溝さやか
横溝さやか
横溝さやか
横溝さやか
横溝さやか
横溝さやか
横溝さやか
横溝さやか
横溝さやか
横溝さやか
横溝さやか

YOKOMIZO Sayaka

32 SHIBUYA2020 2017 嬉々!!CREATIVE蔵
SHIBUYA2020 2017 KIKI!!CREATIVE

33 大阪天国 2017 嬉々!!CREATIVE蔵
OSAKA PARADISE 2017 KIKI!!CREATIVE

左上：35　ロンドン・エリザベス女王生誕パレード　2015　嬉々!!CREATIVE蔵
London/Queen Elizabeth Birthday Parade　2015　KIKI!!CREATIVE

左下：34　東京2020に向けて　2015　嬉々!!CREATIVE蔵
Towards Tokyo 2020　2015　KIKI!!CREATIVE

右上：37　春のオランダ　2016　嬉々!!CREATIVE蔵
Netherlands in Spring　2016　KIKI!!CREATIVE

右下：36　イースターニューヨーク　2014　嬉々!!CREATIVE蔵
Easter New York　2014　KIKI!!CREATIVE

横溝さやか　YOKOMIZO Sayaka

1986年、神奈川県生まれ。神奈川県平塚市にある「嬉々!!CREATIVE」に所属している。人間や動物、キャラクターといったさまざまな登場人物が街中を闊歩する、祝祭的で賑やかな風景を描く。その風景には、施設のスタッフや家族が描きこまれていることもあるという。すべて黒いペンでアウトラインを引いてから、一つずつ丁寧に色を塗っている。テーマや場所の特徴を綿密にリサーチしてから描くため、その土地のランドマークとなるような建物や自然が、目立つように表現されている。横溝は、創作した絵の紙芝居公演も行っている。その絵に含まれる物語をいくつもの声色によって、自ら語り演じている。作品に描かれる人物たちは皆笑顔で話しあい、空に浮かぶたくさんの風船がお祭りやパレードを連想させ、横溝の描く街はいつも平和と優しさに満ちあふれている。主な展示に、「ここから2－障害・感覚・共生を考える8日間」（国立新美術館［東京］、2018年）などがある。

38　さやか劇場　2015　嬉々!!CREATIVE蔵
Sayaka Theater　2015　KIKI!!CREATIVE

佐藤慶吾
佐藤慶吾
佐藤慶吾
佐藤慶吾
佐藤慶吾
佐藤慶吾
佐藤慶吾
佐藤慶吾
佐藤慶吾
佐藤慶吾
佐藤慶吾
佐藤慶吾
佐藤慶吾
佐藤慶吾
佐藤慶吾
佐藤慶吾
佐藤慶吾
佐藤慶吾
佐藤慶吾
佐藤慶吾
佐藤慶吾
佐藤慶吾
佐藤慶吾
佐藤慶吾

SATO Keigo
SATO Keigo
SATO Keigo
SATO Keigo
SATO Keigo
SATO Keigo
SATO Keigo
SATO Keigo
SATO Keigo
SATO Keigo
SATO Keigo
SATO Keigo
SATO Keigo
SATO Keigo
SATO Keigo
SATO Keigo
SATO Keigo
SATO Keigo
SATO Keigo
SATO Keigo

40　ホテル　1998-2005頃　NPO法人グループ彩 生活工房蔵
Hotel　circa 1998-2005　NPO Group Sai SeikatsuKobo

佐藤慶吾　SATO Keigo

1983年、千葉県生まれ。千葉県成田市にある「生活工房」にて絵画やフェルト作品、ニードルワークなど多岐にわたる制作を行う。《ホテル》のシリーズは、カラーペンで描かれた細長い建物群が特徴的である。紙はカレンダーの裏紙が使用されている。佐藤が他の作業の合間に、こっそりと描いていたところを施設のスタッフが発見したという。画面いっぱいに描かれた建物は、佐藤独自の色彩の組み合わせ、一視点のみの構図、似た建物の連続によって、定点観測を思わせる。それらは実際、佐藤が家族と食事をしたホテルの最上階にあるレストランで見た景色——窓の向こうに見えるビル群——を描いたという。四辺を取り囲む縁が、切りとられた窓の情景を強調し、どこか懐かしさを思わせる幻想的な眺めを生みだしている。色を塗りこむように強い筆圧で描かれ、描き手の心に刻まれた風景が垣間見えるようだ。主な展示に、「いえとまちのかたち」展（もうひとつの美術館［栃木］、2014年）などがある。

40　ホテル　1998-2005頃　NPO法人グループ彩 生活工房蔵
Hotel　circa 1998-2005　NPO Group Sai SeikatsuKobo

作品リスト　List of Works

磯野貴之　ISONO Takayuki

01　でんちゅうでんせん
2012–2013 | 鉛筆、油性ペン、紙、段ボール、接着剤、マスキングテープ | 18.8×82.8×19.6（開いた状態）
作家蔵

Telegraph Poles and Electrical Cables
2012–2013 | Pencil, oil-based pen, paper, cardboard, glue, masking tape | 18.8×82.8×19.6（Open）
Collection of the artist

02　作品の記録映像
2023 | 映像 | 22分24秒

Video Documentation
2023 | Video | 22 min 24 sec

辻勇二　TSUJI Yuji

03　心でのぞいた僕の街（令和二年八月十五日）
2020 | 水性ペン、紙 | 83.0×59.7
作家蔵

My Town Peeped with My Imagination
2020 | Aqueous pen, paper | 83.0×59.7
Collection of the artist

04　心でのぞいた僕の街（令和三年九月十二日）
2021 | 水性ペン、紙 | 83.0×59.7
作家蔵

My Town Peeped with My Imagination
2021 | Aqueous pen, paper | 83.0×59.7
Collection of the artist

05　心でのぞいた僕の街（令和四年十月九日）
2022 | 水性ペン、紙 | 83.0×59.7
作家蔵

My Town Peeped with My Imagination
2022 | Aqueous pen, paper | 83.0×59.7
Collection of the artist

06　心でのぞいた僕の街（平成二十二年九月十九日）
2010 | 水性ペン、紙 | 41.5×59.7
作家蔵

My Town Peeped with My Imagination
2010 | Aqueous pen, paper | 41.5×59.7
Collection of the artist

07　心でのぞいた僕の街（平成二十三年三月六日）
2011 | 水性ペン、紙 | 41.5×59.7
作家蔵

My Town Peeped with My Imagination
2011 | Aqueous pen, paper | 41.5×59.7
Collection of the artist

08　心でのぞいた僕の街（平成二十四年三月二十五日）
2012 | 水性ペン、紙 | 41.5×59.7
作家蔵

My Town Peeped with My Imagination
2012 | Aqueous pen, paper | 41.5×59.7
Collection of the artist

09　心でのぞいた僕の街（平成二十五年三月四日）
2013 | 水性ペン、紙 | 41.5×59.7
作家蔵

My Town Peeped with My Imagination
2013 | Aqueous pen, paper | 41.5×59.7
Collection of the artist

10　心でのぞいた僕の街（平成二十七年二月八日）
2015 | 水性ペン、紙 | 41.5×59.7
作家蔵

My Town Peeped with My Imagination
2015 | Aqueous pen, paper | 41.5×59.7
Collection of the artist

11　心でのぞいた僕の街（平成二十七年八月二日）
2015 | 水性ペン、紙 | 41.5×59.7
作家蔵

My Town Peeped with My Imagination
2015 | Aqueous pen, paper | 41.5×59.7
Collection of the artist

12　心でのぞいた僕の街（平成二十八年五月二十九日）
2016 | 水性ペン、紙 | 41.5×59.7
作家蔵

My Town Peeped with My Imagination
2016 | Aqueous pen, paper | 41.5×59.7
Collection of the artist

13 心でのぞいた僕の街（平成三十年九月二十二日）
2018｜水性ペン、紙｜41.5×59.7
作家蔵

My Town Peeped with My Imagination
2018 | Aqueous pen, paper | 41.5×59.7
Collection of the artist

14 心でのぞいた僕の街（令和元年一年七月七日）
2019｜水性ペン、紙｜41.5×59.7
作家蔵

My Town Peeped with My Imagination
2019 | Aqueous pen, paper | 41.5×59.7
Collection of the artist

後藤拓也　GOTO Takuya

15 いえ
2013-2021｜紙、ステープラー｜36.0×53.5×44.0
風舎とみたか

House
2013-2021 | Paper, stapler | 36.0×53.5×44.0
Fusha Tomitaka

16 いえ
2013-2021｜紙、ステープラー｜51.5×59.0×54.0
風舎とみたか

House
2013-2021 | Paper, stapler | 51.5×59.0×54.0
Fusha Tomitaka

17 いえ
2013-2021｜紙、ステープラー｜36.5×28.0×46.0
風舎とみたか

House
2013-2021 | Paper, stapler | 36.5×28.0×46.0
Fusha Tomitaka

18 いえ
2013-2021｜紙、ステープラー｜35.0×25.0×36.0
風舎とみたか

House
2013-2021 | Paper, stapler | 35.0×25.0×36.0
Fusha Tomitaka

19 いえ
2013-2021｜紙、ステープラー｜43.0×52.5×28.0
風舎とみたか

House
2013-2021 | Paper, stapler | 43.0×52.5×28.0
Fusha Tomitaka

20 いえ
2013-2021｜紙、ステープラー｜41.5×30.0×46.0
風舎とみたか

House
2013-2021 | Paper, stapler | 41.5×30.0×46.0
Fusha Tomitaka

21 いえ
2013-2021｜紙、ステープラー｜28.0×31.0×39.5
風舎とみたか

House
2013-2021 | Paper, stapler | 28.0×31.0×39.5
Fusha Tomitaka

22 いえ
2013-2021｜紙、ステープラー｜26.5×27.5×45.5
風舎とみたか

House
2013-2021 | Paper, stapler | 26.5×27.5×45.5
Fusha Tomitaka

23 いえ
2013-2021｜紙、ステープラー｜29.5×29.0×32.5
風舎とみたか

House
2013-2021 | Paper, stapler | 29.5×29.0×32.5
Fusha Tomitaka

24 いえ
2013-2021｜紙、ステープラー｜45.0×25.0×31.0
風舎とみたか

House
2013-2021 | Paper, stapler | 45.0×25.0×31.0
Fusha Tomitaka

25 いえ
2013-2021｜紙、ステープラー｜25.5×27.5×36.0
風舎とみたか

House
2013-2021 | Paper, stapler | 25.5×27.5×36.0
Fusha Tomitaka

26 いえ
2013-2021｜紙、ステープラー｜28.5×27.5×33.0
風舎とみたか

House
2013-2021 | Paper, stapler | 28.5×27.5×33.0
Fusha Tomitaka

古久保憲満　KOKUBO Norimitsu

27 無題
2001-2007頃｜鉛筆、色鉛筆、水性ペン、おえかき帳
25.0-34.0×34.9-36.3×0.5-3.8（計21点）
作家蔵

No Title
circa 2001–2007 | Pencil, colored pencil, aqueous pen, drawing book | 25.0-34.0×34.9-36.3×0.5-3.8 Total 21 works | Collection of the artist

28 未来の上海ディズニーランド
2010｜ボールペン、水性マーカー、鉛筆、色鉛筆、ワトソン紙
156.0×120.0
作家蔵

Shanghai Disneyland of the Future
2010 | Ballpoint pen, aqueous marker, pencil, colored pencil, paper | 156.0×120.0
Collection of the artist

29 大都会とつながる町
2013｜ボールペン、水性マーカー、鉛筆、色鉛筆、ワトソン紙
79.0×110.0
作家蔵

Towns Connected to the Big City
2013 | Ballpoint pen, aqueous marker, pencil, colored pencil, paper | 79.0×110.0
Collection of the artist

30 ネオンオンラインシティ
2014｜ボールペン、水性マーカー、鉛筆、色鉛筆、ワトソン紙
79.0×110.0
作家蔵

Neon Online City
2014 | Ballpoint pen, aqueous marker, pencil, colored pencil, paper | 79.0×110.0
Collection of the artist

31 作品の記録映像
2023｜映像｜1時間18分32秒

Video Documentation
2023 | Video | 1 hour 18 min 32 sec

横溝さやか　YOKOMIZO Sayaka

32 SHIBUYA2020
2017｜アクリル絵具、ペン、キャンバス｜120.0×120.0
嬉々!!CREATIVE

SHIBUYA2020
2017 | Acrylic paint, pen, canvas | 120.0×120.0
KIKI!!CREATIVE

33 大阪天国
2017｜アクリル絵具、ペン、キャンバス｜120.0×120.0
嬉々!!CREATIVE

OSAKA PARADISE
2017 | Acrylic paint, pen, canvas | 120.0×120.0
KIKI!!CREATIVE

34 東京2020に向けて
2015｜ペン、画用紙｜59.4×42.0
嬉々!!CREATIVE

Towards Tokyo 2020
2015 | Pen, drawing paper | 59.4×42.0
KIKI!!CREATIVE

35 ロンドン・エリザベス女王生誕パレード
2015｜ペン、画用紙｜59.4×42.0
嬉々!!CREATIVE

London/Queen Elizabeth Birthday Parade
2015 | Pen, drawing paper | 59.4×42.0
KIKI!!CREATIVE

36 イースターニューヨーク
2014｜ペン、画用紙｜59.4×42.0
嬉々!!CREATIVE

Easter New York
2014 | Pen, drawing paper | 59.4×42.0
KIKI!!CREATIVE

37 春のオランダ
2016｜ペン、画用紙｜59.4×42.0
嬉々!!CREATIVE

Netherlands in Spring
2016 | Pen, drawing paper | 59.4×42.0
KIKI!!CREATIVE

38 さやか劇場
2015｜アクリル絵具、ペン、木材、段ボール
66.3×68.0×53.6
嬉々!!CREATIVE

Sayaka Theater
2015 | Acrylic paint, pen, wood, cardboard
66.3×68.0×53.6
KIKI!!CREATIVE

39　紙芝居公演の記録映像
2023｜映像｜29分37秒

Video Documentation
2023 | Video | 29 min 37 sec

佐藤慶吾　SATO Keigo

40　ホテル
1998-2005頃｜ペン、水性ペン、紙｜42.3-43.0×59.0
(計60点)
NPO法人グループ彩 生活工房

Hotel
circa 1998–2005 | Pen, aqueous pen, paper | 42.3-43.0×
59.0 Total 60 works
NPO Group Sai SeikatsuKobo

Foreword

Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery is pleased to present *Art Brut Then & Now Vol.2 Echoing Cityscapes.*
Art Brut Then & Now is a series of exhibitions that presents, from a variety of angles, artists who have been active in the Art Brut scene in Japan and overseas for many years, alongside new artists who have been exhibited widely in recent years.

The second exhibition in the series, *Echoing Cityscapes*, introduces artists who reconstruct cityscapes full of buildings and houses from their own unique perspective. Each of these cityscapes has unique imagery, with compositions that seem to be looking down from the sky, works that have no set orientation, and groups of buildings in eccentric colors. All of them have a fantastical world view, where we can follow the artists as they envision somewhere new. In addition, the vast stretches of distant cityscapes are intertwined with the more familiar nearby, creating an energy that seems to continue forever.
Each cityscape is like an echo reverberating between reality and imagination, near and far, self and others, and here and there, and continuing to expand unnoticed. We hope that this exhibition will be a chance for each visitor to encounter a special cityscape that resonates with them, whether boisterously or in a quiet manner.

We are grateful to the artists for generously allowing us to display their invaluable works in this exhibition. We also thank everyone who contributed advice and cooperation toward its realization.

January 2023
Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery,
Museum of Contemporary Art Tokyo,
Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

Landscapes Engraved in the Heart: Echoing Memories and Reverberations

KAWAHARA Koya (Curator, Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery)

What comes to mind when you hear the word "**landscape**?" A majestic range of mountains, a horizon stretching on forever, a cityscape filled with skyscrapers? Perhaps the alley visible from the window of your house, cats napping on the fence, or the familiar view from the train during your daily commute to school or work? Everyone has different mental pictures of landscapes, each with a certain distance, and most likely we all have many landscapes that we see in our mind's eye. They can range from the extraordinary to the everyday and are captured within different frames, remaining localized as afterimages, like a mirror reflecting the subject who captures them, whether in space, time, or mood. In that case, landscapes can be said to exist as memories or reverberations at the intersection of the subject who captures them and the actual place or situation.

This exhibition, titled *Echoing Cityscapes*, departs from the expression of "repetition," a characteristic of works known as Art Brut. The title also reflects the "cityscape" motif, which is in harmony with the location of this gallery, and the relationship between each artist and the formation of his or her works. The numerous works, expressed with exceptional concentration and determination, are strengthened as works of art by the density of the repeated acts of expression and the emphasis on accumulation. At the same time, it becomes apparent that these works are not formed solely by the artists' impulses during their creation process. I would like to consider these points while reflecting on the exhibition space, which can also be seen as another landscape.

GOTO Takuya's colorful three-dimensional artworks that mimic houses sit on a display stand in the center of Gallery 1. They evoke a diorama of a small village, and as you approach the display, you may notice that the roofs sparkle. This is due to the countless staples holding the materials together, which is Goto's unique technique. The inspiration for these pieces came from Goto's observation of his brother's house renovation site up close. The use of staples suggests the sound of screw guns commonly used on construction sites, as they drive screws into materials with a buzz-buzz, giving the viewer a sense of realism in the creation of the houses. In his earlier works, Goto used any materials available on hand, including drawing paper, as in the technique known as bricolage. Later, while working on improving his materials, he discovered a new type of wavy paper, like galvanized plate, at 100-yen shops and stationery stores. He began using it for walls and roofs, and developed his own methods and material choices. He is still slowly but steadily building new ideal houses.

On the left upon entering the exhibition hall, visitors can find the works of **KOKUBO Norimitsu**, whose paintings evoke the hustle and bustle of the city. It takes time to fully appreciate Kokubo's painting, including his early drawings in sketchbooks. This is because the motifs in his paintings are densely packed and involve countless shifts of perspective. Viewed as a whole, the images resemble a peering down from above map of the city. However, as you examine the details, it becomes apparent that there is a mixture of viewpoints, such as buildings seen from the front and cars seen from the side, creating the impression of standing inside the depicted world rather than just viewing it from above. The combination of the abstract aerial view and the figurative horizontal view from the ground in Kokubo's urban landscapes seems to capture the chaotic situation of today's urban areas, where buildings are torn down and rebuilt repeatedly. Despite this, Kokubo's painting does not convey a sense of oppression that keeps people at bay, but instead draws the viewer into his world. This may be because we are attracted to the texture of Kokubo's freehand lines and his application of color, particularly the way he depicts light. The soft glow emanating from electric lamps and light bulbs, carefully outlined, and slightly blurred, gives the impression of a world that is lived in. Kokubo's works are created and stored at his home and, like the world they depict, they continue to multiply constantly.

On the opposite side of the room, there is a display of **YOKOMIZO Sayaka**'s paintings depicting collaged landscapes that emphasize the characteristics and landmarks of the places depicted, as well as a device for her picture storytelling shows along with videos of Yokomizo actually performing them. *SHIBUYA2020* and *OSAKA PARADISE* are large two-dimensional works depicting the urban landscapes of the cities mentioned in each title. These large canvases are filled with small stories. Rather than grand, mythological tales, these stories are about familiar interactions between people and happenings in the city that we have all experienced before. The buildings and people depicted in the city lack shadows, and moreover, there is not much difference in size between the foreground and background, showing that the artist is not attempting to create a sense of space through artistic perspective. Instead, her approach is more like that of a picture book, where the scenes of the story unfold on each page in an appropriate and easy-to-understand manner. The fact that the characters are depicted with similar sizes creates a sense of tenderness and warmth, as if each person's experiences are given equal importance. The background story behind the production of these works involves a certain exchange

between Yokomizo and a member of her art studio staff one day. Noticing Yokomizo mumbling to herself in the studio, the staff member listened and found that she was acting out an impromptu story as some kind of character. The staff member suggested that Yokomizo draw a picture book that would allow her charm to shine through. This kind of everyday observation led to a diverse range of creative works, from picture storytelling performances to the production of paintings.

Looking back, you can see the richly colored works of **SATO Keigo**. At one point in his life, Sato kept drawing the same motif on calendar backing paper—a view of hotels that he remembered from a memorable place where he spent happy times with his family. The hotels, drawn from memory, fill the pictures in groups of four to eight buildings. The buildings are composed of a triangular structure for the roof, with a series of rectangles below it. As the ground is not drawn and only the mid-sections to the tops of the buildings are depicted, Sato's viewpoint is clearly closer to the sky than the ground. Furthermore, while the foregrounds of the works depict hotels, a grid of lines can be seen in the backgrounds. According to Sato, the grid lines show the windows on the inside. In other words, he chose to push the windows that should normally be in the foreground to the background. This makes us wonder about the other buildings that were likely visible from those windows, as well as the clouds, birds, the sun, and the moon in the sky that might have been present. However, Sato drew only the hotels in a powerful way. The strongly frontal compositions and the large, clearly drawn forms give the works a power reminiscent of the iconography of kings depicted in ancient Egyptian paintings. The kings are said to have appeared much larger in the minds of the people at that time than they really were. It's interesting to think about how the hotels appeared to Sato.

Moving on to Gallery 2, in the center of the room is **ISONO Takayuki**'s work, *Telegraph Poles and Electrical Cables*. The work features telegraph poles and electrical cables repeatedly drawn in plain sketchbooks. It took about three months to complete the 36-volume production, which, when combined into a single book, resulted in a heavy work resembling an encyclopedia. The speed and rhythm of the lines in the work suggest that the artist drew the pictures lightly and quickly, one after the other. The scribble-like depiction is a result of the artist's ability to produce images in a burst of concentration and energy. However, the overflowing images were not simply drawn with momentum, but were compiled like a reel of images in a video, like a landscape that has been edited together. The sight of telegraph poles and electrical cables flowing past a car window was a daily scene of Isono's commute to and from school. In the exhibition room, a video of almost all the pages of the 36 volumes is projected alongside the artwork. Watching the images played frame by frame is like vicariously experiencing what Isono saw.

The telegraph poles and electrical cables stretching on endlessly seem to symbolize Japan's chaotic landscape. They are almost like a part of the primal landscape of the Japanese people, visible everywhere one walks in the city. From the staves stretching across the margins of the city that Isono has drawn, you may be able to hear the latent soundscape of the city.

In the same space, contrasting with Isono's work, are the finely detailed cityscapes depicted in the art of **TSUJI Yuji**. Tsuji's landscapes are reminiscent of a type of perspective known as the bird's-eye view, a technique that is used to depict the ground as seen from the perspective of a bird flying above. It is often used in maps for leisure activities such as sightseeing and hiking. Tsuji remembers the cityscapes of the places he visited with his family, as well as the sea, rivers, bridges, and trees he saw along the way. He also remembers the small houses, pedestrian bridges, and numerous vehicles he saw in the distance from high places. The artist's drawings are a detailed interweaving of memory and imagination, starting from encounters with landscapes experienced in various places. Tsuji's monochrome landscapes, drawn only with a black pen, incorporate aspects of the world that he has seen and heard—the voices of people coming and going, the sound of the engines of passing cars, water hitting bridge piers, and wind blowing between buildings. Recently, at the suggestion of his mother, Tsuji expanded the composition of his works, which had long been drawn on a single sheet of paper horizontally, to two sheets of the same paper joined together vertically. This change gives the viewer the impression that the world Tsuji depicts extends far beyond the edges of the paper into reality. One can imagine Tsuji unfolding the ever-expanding landscape.

Walking around the exhibition hall, you encounter each artist's expression of landscapes—landscapes expressed in ways you have never seen before. These are different from so-called landscape paintings done in a realistic technique with a well-defined perspective. The landscapes seen here are not so much drawn with the eye and hand, but rather reflect what the artists gazed at in their hearts and then depicted over and over. The *repetition* of motifs and techniques strongly expresses their attachments and what is important to them, as well as the lingering echoes that have continued to reverberate within them. These have accumulated within the artists' innermost beings, and their works inherently embody their daily interactions with familiar people, including family members and facility staff, the activities repeated in their daily lives, and the crystallization of communication that is difficult to manifest. The landscapes that you have seen and that are etched into your own heart are certainly echoed, either as memories or as reverberations, resonating with their artworks.

Artist's Biographies

ISONO Takayuki

Born in Toyama Prefecture in 1997. He began creating art while enrolled in a special needs school. He would draw graffiti on the walls of the school, in the corners of the floor, behind lockers, and in other hard-to-find places and look forward to it being discovered. In 2012, he suddenly began drawing telegraph poles and electrical cables in notebooks at home. This was apparently the scenery that he had glimpsed through the windows while lying across the backseat of a moving car. *Telephone Poles and Electrical Cables* took him about three months to draw, working day and night. The drawings of 42,000 telegraph poles and countless electrical cables linking them together fill a total of 36 notebooks. As the electrical cables are drawn to connect across all of the pages, viewing them continuously recreates the transitory scenery passing by through the car windows. Light, simple black lines flow endlessly and vigorously across the white pages, creating a tranquil world. Major exhibitions include *KOMOREBI Art Brut Japonais* (Le Lieu Unique, Nantes, 2017).

TSUJI Yuji

Born in Aichi Prefecture in 1977. He intricately depicts imaginary streetscapes that create a sense of déjà vu using only a black water-based marker. His subjects consist of the numerous elements that make up a town, including houses with tiled roofs, buildings, roads, train tracks, bridges, tunnels, and moving vehicles, along with rivers, the sea, boats traveling on the water, and dense forests. The compositions rendered in his sure hand employ a bird's-eye perspective. The images are filled with fluctuations and dynamism that create a sense of three-dimensionality. At the same time, the works are characterized by an almost complete absence of humans. Nonetheless, signs of life lurking in the images evoke invisible buzzing and murmuring, fascinating viewers. Tsuji's artwork apparently developed from the picture diary that he began keeping in elementary school. In addition to daily life, his picture diary also records scenes that impressed him on trips. These fragments of memory are contained in his streetscapes, where memory and fantasy intertwine and continue expanding in the form of a monochromatic world. Major exhibitions include *Art Brut Japonais* (Halle Saint Pierre, Paris, 2010-11) and many others in Japan and overseas.

GOTO Takuya

Born in Miyazaki Prefecture in 1987. He creates art at the facility "Fusha Tomitaka" in Hyuga City, Miyazaki Prefecture. Around 2013, he began producing colorful three-dimensional works modeled after houses. His main material is stapled drawing paper. He creates various types of houses by combining materials representing grass, gravel, and tiles purchased at 100-yen stores. In the first step of his production process, he draws a plan on the cardboard that will serve as the base. Then, he assembles the base according to that design. Next, he builds posts from the base and pastes walls to the posts. Since he reconsiders the shape and purchases the appropriate materials as he carries out each step, the works become bulkier toward the top. The towering walls and bulging roofs create a sense of organic momentum and gravity-defying power. Despite the bright and cheerful appearance of the houses, the paper frames have enough strength and stability to support the entire house. Goto's daily worktime is an approximately 10-minute period after lunch, which he spends working diligently on his art in the dining room. Major exhibitions include *Gift: Miyazaki Artist File Exhibition* (Takanabe Museum of Art, Miyazaki, 2021).

KOKUBO Norimitsu

Born in Shiga Prefecture in 1995. He has continued to draw neo-futuristic cityscapes since he was in elementary school. At first, he would draw quietly in sketchbooks that he had brought to school, but he gradually began to use large sheets of paper with the encouragement of a schoolteacher. Nonetheless, evidence of his efforts to create larger drawings by pasting more paper can be seen even in his early works. He restructures the images flooding his memory and the internet into intricate depictions of clustered narrow high-rise buildings, commercial facilities, and vehicles coming and going. The juxtaposition of structures resembling clock towers, churches, shrines, and temples along with military installations and large statues evokes an imaginary metropolis fusing cultures from all times and places. Although the images have large-scale compositions as if peering down from above, the individual subjects are depicted from a horizontal perspective as well as freely in all directions. As a result, the scenes themselves seem to be alive and squirming with energy, like a cell growing according to its own rules. In addition to *Genius: The Human Gift for Creating and Living* (Shiga Museum of Art, Shiga, 2022), his paintings have been exhibited and become part of collections at art museums both inside and outside Japan.

YOKOMIZO Sayaka

Born in Kanagawa Prefecture in 1986. She belongs to the art studio and welfare facility "KIKI!! CREATIVE" located in Hiratsuka City, Kanagawa Prefecture. She depicts festive, bustling scenes of figures such as humans, animals, and characters striding through town, which apparently sometimes include the facility's staff or even her own family members. After drawing all of the outlines in black pen, she carefully colors them in one by one. Because she thoroughly researches the characteristics of the locations and themes before drawing, landmark buildings and natural features are depicted prominently. She also creates picture storytelling shows for her works, in which she acts out the stories contained in the pictures using different voices. All of the figures she draws are depicted chatting with smiles on their faces, and the many balloons floating in the sky evoke a festival or parade. The towns she depicts are thus always filled with peace and warmth. Major exhibitions include *First steps toward disability, sense and co-existence* (The National Art Center, Tokyo, 2018).

SATO Keigo

Born in Chiba Prefecture in 1983. He creates art in a wide range of genres including painting, feltwork, and needlework at the studio and welfare facility "Seikatsu Kobo" in Narita City, Chiba Prefecture. His *Hotel* series is defined by its clusters of tall, narrow buildings rendered with colored markers. The paper used is calendar backing paper. Facility staff members originally discovered him drawing secretly during breaks between other tasks. The images are crammed with buildings depicted in Sato's unique color combinations, with the single-perspective compositions and series of similar buildings reminiscent of fixed-point observation. Apparently, these scenes are actually based on the buildings he saw through the windows of a restaurant on the top floor of a hotel where he dined with his family. The borders around the four sides of the images emphasize the sense of peering through a window, creating somehow nostalgic, dreamy scenery. The images are intensely colored with strong pressure, as if glimpsing scenes etched into the artist's mind. Major exhibitions include *Shape of Houses and Towns* (MOB museum of Alternative Art, Tochigi, 2014).

イベント　Event

タイトル：横溝さやかの紙芝居公演「ピ・ヨンジュとオレ三世の中華料理大対決２」
日時：2023年1月21日(土)14時～15時
会場：東京都渋谷公園通りギャラリー 交流スペース
公演者：横溝さやか(本展出展作家)
定員：15名程度(先着順、当日整理券配布)

Title: Picture-story Show by YOKOMIZO Sayaka
Date and Time: Saturday, 21 January 2023, 2:00pm-3:00pm
Venue: Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Interactive Space
Storyteller: YOKOMIZO Sayaka
Capacity: 15 people *First 15 arrivals, distribute the numbered ticket.

タイトル：ギャラリートーク
日時：2月11日(土)14時～14時30分
3月11日(土)14時～14時30分　※手話通訳付き
会場：東京都渋谷公園通りギャラリー 展示室 1、2
定員：各回10名程度(先着順、事前申込不要)

Title: Gallery Talk
Date and Time: [1] Saturday, 11 February 2:00pm-2:30pm
[2] Saturday, 11 March 2:00pm-2:30pm
*Japanese sign language will be provided on Saturday, 11 March.
Venue: Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Gallery 1 and 2
Capacity: 10 people in each time *Order of arrival. No booking required.

写真撮影・提供
Photographer and Courtesy

大西暢夫／ONISHI Nobuo（p. 34、下）
柿島達郎／KAKISHIMA Tatsuro（pp. 20-22, 28-29, 34-35, 37, 40-43, 46-47, 49）
佐藤基／SATO Motoi（pp. 10-13, 16-19, 23-27, 29-33, 36, 38-39, 44-45, 48, 50, 63）
Crashi Films（pp. 14-15）
ボーダレス・アートミュージアムNO-MA／Borderless Art Museum NO-MA (p. 34、下)
記載のない画像は、東京都渋谷公園通りギャラリーによる撮影
All images without credit are taken by Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery.

アール・ブリュット ゼン＆ナウ Vol.2　Echo こだま返る風景

[展覧会]
企画・運営：河原功也（東京都渋谷公園通りギャラリー）
補佐：佐藤真実子（東京都渋谷公園通りギャラリー）
広報物デザイン：矢野恵司
広報物印刷：関東図書株式会社
記録映像等動画撮影・編集：Crashi Films
広報：浅野百衣、中村尚子、三好武司（東京都渋谷公園通りギャラリー）

[カタログ]
企画・執筆・編集：河原功也
翻訳：株式会社イデア・インスティチュート
デザイン：矢野恵司
印刷：株式会社山田写真製版所
発行：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館 東京都渋谷公園通りギャラリー
発行日：2023年3月24日

Art Brut Then & Now Vol.2 Echoing Cityscapes

[Exhibition]
Curator: KAWAHARA Koya (Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery)
Assistant: SATO Mamiko (Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery)
Publication Design: YANO Keiji
Publication Printing: Kanto Tosho Co., Ltd.
Video Shooting and Editing (Video Documentation): Crashi Films
Press Officer: ASANO Moe, NAKAMURA Naoko, MIYOSHI Takeshi (Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery)

[Catalogue]
Texts: KAWAHARA Koya
Editing: KAWAHARA Koya
Translation: IDEA INSTITUTE INC.
Design: YANO Keiji
Printed by: Yamada Photo Process Co., Ltd.
Published by: Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Museum of Contemporary Art Tokyo,
Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture
Publication Date: 24 March 2023

Artwork © The Artist
©2023 Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Museum of Contemporary Art Tokyo,
Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

東京都渋谷公園通りギャラリー
Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery

Equipment Exchange Vol.2

Equipment Exchange

Equipment Exchange

Equipment Exchange

Equipment Exchange

Equipment Exchange

Equipment Exchange

Date:

Saturday, 21 January 2023

Saturday, 28 January 2023

Saturday, 4 April 2023

Sunday, 9 April 2023

Saturday, 28 April 2023

東京都渋谷公園通りギャラリー

Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery